

湯島の空也

くうや

かんのあさろう
神野麻郎

丘のふもとに藁屋根が点在する里の入口。すぐにばらばら、数人の男たちが走り寄ってくる。今日もまた棒もて打たれ、石もて追われるか。しかし男たちは打たぬ。

——御坊なりや？　さらば、里の境の川原に行倒れの骸二つあり。ケガレ恐ろし。供養、葬りしてたべ。

承り申す、と答え、男たちについて行く。川原の菰にぐるんだ遺骸は、犬鳥にも喰われ、もうだいたい傷んでいる。

——この二人、ひとりずつわれらが里内に来て倒れし。いづくの里よりか、飢えて逃げ来たりし者ならむ。

——茶毘に付さむと思う。木と柴と油、下組みしたまえ。

用意終り、火を放つ。炎が立つ。その中でのたうつごとき黒い遺骸に向かい、念珠を擦り合わせつつナムアミダブツ、ナムアミダブツ……。その音声あまりに高く、里人は驚いた。

日が暮れ、里人の小家に泊まった。すすけた板間、囲炉裏の櫓の明かりを顔に映しながら、夫婦子供に交じって麦と粟の粥をすすする。主がしみじみと嘆く。

——二年続きに不作なるも、長の徴りは厳し。食い物足らず、わが母は去年の夏に弱りて身まかりぬ。秋に赤子生まれけり、そも乳足らで育たず。世の中、かほどにつらきものか。先に焼きし人々、われらには他人事ならず。

親たちは朽木のごとく痩せ、二人の垢づいた子供も哀れなほどひ弱そうだ。

——死者の供養のためわが後世のためも、十遍なりと一遍なりと、ナムアミダブツ申したまえ。

涙を袖で拭いつつ、主が初めて名を問うた。空也と申す、と僧は答えた。

——御坊、いづくよりかおわしし？

——播磨の方よりもうではべりき。今朝、淡路より水門を渡りて阿波の泊りに着きはべりき。

——播磨とは遠し。かく乱れたる世に、修行の旅もさぞ辛からむ。さて、これよりいづくにかおわす？

——湯島ゆしまという所に渡らむと思いはべり。

男の顔がやや曇った。

——湯島とは。ここよりは辰巳の方の海中なる、かの湯島か……。それはいかがなものか。

海賊おる怖き島なりというに。いな、われもいまだ行きしことはなけれど……。そこも修行の所なるか？

——えい。ありがたき観世音菩薩いますと聞きはべりし。

僧は海賊と聞いても顔色を変えることなく、湯島への行き方を問うた。

——ここより南の方へしばし行かば、那賀の大川あるべし。それを渡りてまた南の方へしばし歩かば、橘という浦に着くべし。その港より舟の便りありと聞く。

あかつき、夫婦に見送られながら立つ。妻が竹皮に強飯こわいを包んでくれたのを、僧はおしただいて受けた。

田畑が切れると野原、また田畑が現れて里。右手に平行する山々は緑濃く、竹林多く、播磨などよりも温暖な相である。里を三つ、四つと通り過ぎると、青々とした豊かな水を運ぶ大川に当った。広い川原の葦群れの切れた所に渡し船が一艘、そばにいた鬚面の男は法外な舟賃をふっかけてきた。

対岸に着いてからも、ほとんど休まず憑かれたように歩き続ける。右手から山が迫ってきて、平野がしだいに狭まった。ふと東の方に松原を目にし、惹かれて立ち寄ってみると半里もあろうかという白砂の浜、青い海原の正面の沖に、島が一つくつきりと横たわっている。網を繕う海人に訊ね、それこそが湯島だとわかった。やさしいかたちだが起伏もある。仏の寝姿のようだ。その後ろに遠くかすみ、垣なして長々と続いているのは紀伊の山並みらしい。島に向かい、手を合わせて祈った。

もとの道に戻り、山に沿ってしばらく行くと海に落ちている丘、それを向こう側に越えると目の前にいくつかの小島を浮かべた美しい湾が開けた。浦に面した小山のへりに、漁で栄えているのか家並がだいたい続いている。そのすぐ前が橘の港だった。舟や人が集まり、出入りする舟もある。海人の小舟に混じって帆柱を立てた大船も見えるのは、土佐通い、あるいは淡路、難波通いの船か。

すぐ、あたりの人たちに湯島への便船を聞いて回った。だが、答えはつれなかった。ある海人は、「さる舟ふねここにあるべきや！」となぜか腹立てて怒鳴った。別の舟人は、「オサ

シ、オサシ……」と何やらわからぬことを言つて口をつぐんだ。話に耳を傾けてくれた者も、「命惜しくば止めよ。汝、かかる所まで歩き来たるはいとおしけれど、引き返すべし」と諭した。そのうち闇になりゆき、近くの魚臭い海人の網小屋を借りて寝た。

次の日も夜明け前から、何人にも聞いて回った。しかし昨日と同じだった。それでも僧はあきらめず、もし便船なくば、自ら筏を組みても島に渡らむ、とまで思う。港近くの岩の上に坐り、湾に浮かぶ小島の向こうの沖に湯島を眺めた。今日はかすみがかつている。

白っぽい秋の日に包まれながら青海原に目をやっていると、気の弱りか、それとはなく来し方が思い返される。

発心はまだ十幾つの時、初めは先達につき、後には一人で、有髪の優婆塞として修学しつつ諸国を巡った。草を枕にしながら、ある里に水が乏しければ井戸を掘り、道悪ければ直し、病の人には声がけて薬方を教え、放置の屍あれば集め焼いて供養した。けれどもそうして行く先々で目につくままに菩薩に倣う利他の行を重ねてみても、世の人の悲惨勞苦は少しも減らない。もとより凡夫たるもの、身一つにても煩惱熾烈にして四苦八苦より免れず、日々に犯す大小の罪業も苦の因となる。そのうえに世の中の天変地異、飢饉また疫病争乱はいかんともしがたく、悪政もはびこり、人々はただ喘ぎ泣いているしかないのだ。「いかにせば人は救われるや?」、若い胸に、この難問がつくづくと迫った。

二十歳を過ぎ、縁あつて尾張の国分寺で受戒して沙弥となつた。そのうち、播磨の国府に近いある山寺は一切経を蔵すとの評判を聞いてただちに赴いた。そして峰相寺というその寺で数年、経論の修学に明け暮れるうちにようやく悟るところあり、般若経説くところの「空」の真理を深めつつ、阿弥陀仏の救いを説く浄土法門に帰依した。浄土法門の中でも、阿弥陀仏の御名さえ称えれば、人は誰でも苦界を逃れて極楽往生できるといふ教説に出会うに至つては、身体中がうち震えた。念仏往生、ただただ念仏さえ称えれば人は誰でも救われる、この真実を広く世に伝えて人々を救うことをこそ、わが生涯の行業とせんか、と力んだ。しかしなお学問のみでは深い信は得られず、わが非力もひしひしと自覚され、悩み、鬱々とした。

そうしていたところ、この夏の安居の時、たまたま寺に立ち寄っていた一人の行者から湯島のことを聞いた。豪快にして智恵も経験も深いその先達はこう語つた。

——阿波の東の海上に湯島なる小島あり。地勢靈奇にして、天然幽邃なる所なり。そこに靈験あらたなる観世音菩薩像おわします。われ、かつて四国遊行の途次、その島に渡りてしばし修行せし。さてありがたくも、観音の示現をぞたまわりし。人々、いまだあま

り知らねど、かの湯島は観音の住地、華嚴経にいうところの、かの南方海上補陀洛山ふだらくさんにこそほかならね。貴僧も、きと行きて恵み蒙あづかれ。かかる破戒無慚しこつがの輩多き寺などに籠りて多年修すとも、無益なること必定。墮落するのみ。

僧はこれこそ仏の導きにほかならぬと信じ、寺での修学を切り上げて旅立ってきたのだ。氣を取り直し、港の岸近くで乞食こじきに立った。手に腕を持ち、誦経する。日の影が移ろう。しかし立ち止まる者は少なかった。腹も減ってきた。今日は朝から何も食べていない。

もう日が暮れかかった時、一艘の大船が岸を離れて人々がばらけた後、前に男が一人立ち、懐から念珠を取り出し、合掌して経を聴いた。一節が終わると懐から銀の粒を一つ取り出し、からんと腕に入れ、

——ありがたき経なりけり。つきては御坊、日暮れ近きに、今宵の宿りは定めたまうや？ さにあらずは、わが小家に泊りたまいな。さて少し、われにみ仏の教えなりと伝えたまえ。

と丁重に誘ってくれた。

身なりはこざつぱりとして、体格のよい五十がらみの男、僧は合掌し、礼を述べて男に従った。男が通ると行きちがう人ごとに身をかがめて挨拶していくので、男がこの辺りの長者らしいとわかった。

丘のふもとの家並のそばから石段をだいぶ上った、湾を見下ろす高みにある屋敷、大きな構えの母屋の玄関に入ると、小女がすぐ水盥を運んできた。男は、われは頼信と申す者と名乗った。

——この橋の浦にていささか船の荷役の業などをしはべり。上がりたまいな。

と僧を部屋に通し、すぐ家の者に酒肴の用意を命じた。

僧は酒魚は遠慮して、温かい米の飯と汁と菜をありがたくいただいた。その後、頼信は、——かく遊行の人をお泊め申すこと、たびたびはべり。年ごろは弘法大師のご遺蹟慕い、京や紀伊の方より室戸をめざし、この辺りを通らるる行者、ようよう増ゆ。われら、かかる辺土に日を送るゆえ、賢さかしき出家すけよりみ仏の道のこと、はたまた京や他国のありさまなど承るを、またとなき楽しみとはしはべる。

と語った。そしてひとしきり、仏道について訊ねた。その問いは並の行者などよりも詳しく、鋭かった。若い僧は言葉を選び、浄土法門の立場から答えた。

何かお困りのことはないか、と訊かれたので、

——われ、湯島に渡りたき望みはべり。ためにここに参りはべりし。されどそれは難かたきよ

し、港にて聞きはべりき。

——湯島に？ 何ゆえに渡るを望まるるや？

僧はまっすぐ頼信の目を見て来し方のことを正直に話した。わが年来の宿願を語る時には思わず涙がにじんだ。話が終わると、聞き入っていた頼信はひとつ大きくうなずき、

——行者、湯島に渡るはよきことにはべり。さきさきにも優婆塞、沙弥らあまた渡り行きしよ。湯島の観音は靈験あらたなりと、この浦になりわう者ら、皆崇めたり。われも年に一たび二たびは必ず参れり。ただ、年ごろはオサシの守り強うなりて、皆人やや行きかねたり。オサシというは、この辺りの海を領く海賊なり。湯島に城のあんなり。されど、難きこともあるまじ。承るに、御坊の宿願並々ならず。こと叶うべく、近きうちにこの頼信、何とか計らい申すべし。

と頼もしく請け合ってくれた。

頼信が信心深いことは、母屋に仏壇を設け、観音像を祀っていることから知れた。次の日の夕はその仏壇の間で、頼信に請われて法話をした。頼信の縁者や従者など、座敷に二十人もが集まった。僧は携えている六道絵を掛けて見せ、極楽を説き、念仏の功德を語り、十遍でも五遍でもたとえ一遍でも真摯にナムアマダブツと称えれば誰でも極楽に往生できる、と熱心に説いた。播磨の寺で修学に励んだ成果か、弁舌にはよどみがない。会衆は讚嘆、すすり泣きする者たちもあり、説法が終わると頼信をはじめ何人もが僧に結縁した。頼信は、

——念仏往生とは、耳新し。御坊はよき教え、授けたまうよ。われも明日よりは、朝ごと夕ごとに阿弥陀仏を称え拝まむと思いたまうる。

と低頭した。

その二日後の朝、すべて頼信の手配によって、僧は橘の港から湯島行きの小舟に乗ることができた。頼信はわざわざ港の岸まで見送りに来てくれた。穀物の麻袋がいくつか積みこまれた。「幸くませー」と岸で袖を振る頼信に辞儀を返しながら、涙があふれる。ふと頼信が、昔家を飛び出した時に道に立っていつまでも見送ってくれた父親の姿に重なった。

次郎と名乗った屈強な若者の漕ぐ櫓舟は、小島がいくつか浮かんでいる好景の湾を出ると、湯島を左手の沖に見ながらしばらくは長々と続く半島の陰を進んだ。所々に海人小舟や鷗鳥の浮くおだやかな海、だがいったん半島を離れて沖に出ると、急に群青色の海にうねりが出て白波も立つようになった。

——ここは手向けする所。海神恐ろし。風風ぎたる日も、この所は必ず揺らるるなり。

と次郎は言い、用意の幣を海中に投げた。だがうねりはますます高く、深さも知れぬ水の上に小舟の揺られること木っ端に異ならず、ざつと降りかかってくる飛沫に身は濡れそぼつ。僧はさすがに舟底に突つ伏し、観世音を念じる。次郎はと見れば、しかし慌てるふうもなく波の山に向かい、トモの板に二つの足裏を吸いつけたようにして果敢に櫓を操っている。島に入る試練のような波との闘いは果てなく続くようだったが、そのうちにあたりがふつと風いだかと思えば、もう湯島の島陰に入っていたのだった。

島のへりに沿って進むと、ふところを開いて迎えるように島が左右に割れて間に瀬戸が開けてきた。左手の大きな島が主島か、家の屋根も見えるあたりには石垣が長々と続き、物見の櫓らしきものも立っている。と、待ち伏せていたように大きな岩の陰から小舟が不意に現れ、まっすぐに近づいてくる。次郎は漕ぎ手を休め、それを待った。胴体を横づけにすると、舟の髭面の男が僧に鋭い一瞥をくれた。次郎は何やら朱色の文様の彫りこまれた大きな木札を男に見せ、そして積んでいた袋の一つを手渡した。小舟はすぐに離れて瀬戸の方に戻っていく。次郎、

——かの石垣見ゆるあたり、オサシの城なり。よその者には隠す。見張り所、島の所々にあり。御坊も今よりは心に留めたまえかし。

主島の西側に沿って北上する。崖、小さな岬、石浜と続き、その上の島山は意外に高く大きい。島の北端に浜からかたちよくせり上がる深緑の山が見え、「かれなるが観音山」と次郎が教えた。その山ふもとの、一面に大きな丸石の敷く浜に着く。舟に碇を打った次郎は、荷を背負い、先に立って案内する。藪中の小道を少し行くと、急に木の間から田畑の景色が開け、山際には小家も数軒立ち並んでいる。三方を小山に囲まれた所で、ここではさつきの荒波がうそのように、光がおだやかに溜まり、風も絶えていた。竹林のそばを通って家どころに入っていくと、木の下で檻樓をまとった幼い子供たちが歌いながら遊んでいる。次郎は家の庭先で箕をつくるっていた老人に声をかけた。白髪の小柄な老爺が腰を伸ばして立ってきた。

——これはこの野辺のべの里ふるおきなの古老なり。前にも幾人いくたりも出家を見たまいき。何なりともこの人に申し、修行したまうがよろしからむ。

そして、担いできた袋の一つを老爺に渡した。すべて頼信の行き届いた心遣いだった。次郎は老爺と二言、三言話すと、休む間もなく、橘に帰ると身を翻した。

家どころからは少し離れて、観音山のふもとに木々に埋もれるようにして古い草庵が一つ立ち、近くには井戸もあった。庵は無人で、床も戸も所々こぼ毀れている。

——さきざきにも御坊のごとく、行者たびたび修行に來たりたまひし。行者のほかにも阿波、紀伊より詣ずる人多かりしが、一年前に事出で來、それよりは誰も訪なわず。御坊、運よし。よく努めたまえ。

その実方ましかたと名乗った実直そんな古老はしわがれた声で告げた。

木の根のごつごつと這う、曲がりくねる山道を登る。日は中天にあるが、椎やタブの木の枝葉が空を覆い、坂道はむしろ小暗い。僧の口はたえず動いている。ナムカンゼオンボサ、ナムカンゼオンボサ……。

息を切らしながら頂きに着く。木立に守られた小さな観音堂、その檜皮の屋根にも前のわずかな庭にも、木洩れ日が紋様を描いている。頭上で風が騒ぎ、下からは潮騒が這い上ってくる。

小暗い堂の中に入り、筵の上でいつものように五体を投げ、礼拝する。正面の壇上には古びた厨子の中に一尺ほどの十一面観世音の立像。その前に坐し、念珠を繰りつつ陀羅尼を称え、誦経する。

一日六度、朝昼晩に僧は同じ勤行をくり返す。願いはただ一つ、向かう観音像が何かのしるしを見せてくれることだ。わが願いが届いて何らかに示現がありさえすれば、そうすればわが日ごろの迷いはすっかり解け、自分はより強者になれると僧は信じていた。

だが、そうして雨の日も風の日も漆黒の真夜中も、怠りなく行じてもう五十日にもなるのだが、いまだ何の靈驗も得られずにいる。今日も昨日や一昨日と同じく、空しく終わるのか。

堂を出て、すぐ左手にある岩場の上って坐った。すぐにあくまで明るい光と風とにさらされる。青海原の向こうに紀伊の山並みが今日はいくつきり高々と稜線を描いている。かつて遊行した吉野熊野はあのあたりか、高野はかしこか。

甲斐なきことに自分は力を尽くしているのか、と僧はうなだれる。そして疑いも兆すのだ。「地勢靈奇にして、天然幽邃なる所なり」と、かの先達はこの島を讚えた。まことにそのとおりだ、この島のなりは奥深い。けれども……、ただそれだけなのではないのか。ここが観音浄土、補陀洛世界というのはまことか……。

いやいや、と僧は頭を振って目を閉じた。そして坐りなおして般若經の教える空觀に没入しようとする。尾張の国分寺で得度した時、僧は自ら沙弥名を付けて空也と名乗った。それは、「空」という仏の教えの根本をわが心身に深く刻み込もうとしたのだった。しかし

今、俗念は跳梁し、心は麻のごとく乱れる。坐している岩から下は四十丈もの崖がほとんどまっすぐ海面までなだれ落ちている。下方で岩を打って鳴る底深い波音は、わが望みを嘲り笑うがごとくにまがましい。

疲れを引きずりながら山ふもとに下りた。庵に近づくと、女ののんびりした歌声が聞こえてきた。庵の前にテゴが足を投げ出して坐り、小犬の背を撫でている。肩に小鳥が一羽止まっている。気配に歌い止めて立ち上がり、にっと笑って、

——御坊、足音よりするに、またもの思うや？　これ、食え。

と、手の小籠をさし出す。椎の実がこぼれるほど入っている。

——汝、拾いしや？

——しかなり。この秋もお山によう落ちてあり。里の人は皆拾いに行く。家に貯めておき、冬の間にならずに食うなり。

僧は礼を言つて受け取る。テゴを見て、自分の強張っていた顔がようやくゆるんでいくのがわかる。

島の娘だ。テゴは今年十六という、古老の実方の孫娘だが、盲目である。目は見えぬが、手馴れの竹杖を器用に使いながら一人でどこにでも出歩く。家事もすれば野らの仕事も怠らない。かわいがっている白犬がいつもまつわりついている。実方に言われているのか、よく庵にもやって来て、「お布施」と穀物やら野菜やらを恵んでくれる。父母はすでに亡く、小家で実方と三つ下の弟と暮らしている。

テゴは心に思うままにしゃべるようで、気が置けない。軽口を叩いて僧を笑わせる。そして歌が好きで、家でも野らでも娘らしいきれいな声でよく歌っている。でも僧の知らない歌が多く、いつか、「それは何の歌なるや？」と訊いてみたことがある。「知らぬ。幼きころより聴きて覚えし歌もあり、おのずと出で来たれる歌もあり」とテゴは答えた。興が乗れば、自分で作った節に思いつくままに詞を投げ込んで歌つてもいるらしい。まことか、テゴが歌うと近くの小鳥が寄ってきて嬉しげに唱和するのだという。

テゴは、今朝方は実方の用で、弟といっしょに久しぶりに山越えして瀬戸まで行ってきただと言った。瀬戸というのは島の南にあるオサシたちの里の名だ。湯島にはこの野辺の里と瀬戸の里だけに人が住んでいる。

——瀬戸は何ごとかありてもの騒がしかりき。さていかなることならむ、かしら頭、われに御坊のことをさまざま問いたり。されど、案ぜずともよし。御坊はもの思う癖あれど、よき人なりと言いおきしに。

僧は苦笑した。

瀬戸の里に入るのをよそ者は固く禁じられている。二年ほど前にあった事件というのは、オサシと敵対している海賊集団の間者が二人ほど行者になりすまして野辺に入りこみ、瀬戸のようすを探り、折あらば火を放って頭を暗殺しようと狙っていた、それが事前に露見して間者はなぶり殺された、というものだった。それ以来、オサシの警戒は厳しくなり、島に行者が渡ることも禁じられたという。僧がやって来られたのはまったく、勢力ある橘の頼信のおかげだったのだ。

よそ者が島に入ってくるのは強く警戒するけれども、島内の二つの里の間では行き来があった。実方によれば、野辺の方はオサシのゆかりではなく、昔島の観音に慕い寄るように、先祖たちがあちこちからやって来て住みついた、そして耕作、すなわち、竹細工などをするかたわら代々観音堂を守り、各地からの参詣の人々の世話も続けてきたという。観音堂には瀬戸の人々もよく参りに来るらしい。

翌日の午後、テゴがまたやって来て瀬戸の頭が僧を呼んでいるという。里に死者が出たので葬りを頼みたいというのだ。僧は道を聞いて一人で出かけた。野辺の平地が尽きる所からは登りになる。手を突けば山石がぼろぼろこぼれる急坂を登ると、今度はタブや椎の小暗い森で、山は意外に深い。塞の神を祀ってある峠にかかると、見張りの男に誰何された。名乗ってわけを言うと、よし、と通してくれた。かたわらから破れ衣のはしこそうな少年が飛び出してきて先に立ち、いっしょに曲がりくねる坂道を下った。途中から道の左右に段々畑が開け、日に焼けた肌の女たちが這いずるようにして働いていた。

島と島との間の瀬戸に面して、防備のための石垣が長々と築かれている。その内側に隠れるようにして小家が雑然と建ち並んでいる。少年の案内のままに、少し奥まった所の高垣をめぐらした構えの大きな屋敷に入っていくと、奥から頭だという蓬髪の眼光鋭い大男が出てきて内へと招いた。部屋に上がると死者が二人、衾に寝かされ、まわりを人が取り巻いている。頭が野太い声で言う、

——昨日、南の方の海上にて諍いありき。わが味方、一人は斬られて死に、いま一人も斬られ、舟から落ちて溺れ死にけり。

一人は若者、もう一人はまだ少年だった。僧は死者たちに向いて合掌し、念仏を称えた。

それから頭に、茶毘に付すか、土に埋めるかと訊ねた。

——いな、ここにては、死なば骸は磯の岩間に捨つる習いなり。鳥、魚が食らう。

僧は茶毘を勧めた。

——火は骸を浄めはべる。われ前に諸国を歩き、野辺に捨てられし骸あまた、火もて浄め、み魂を送り申し来し。

「しばし待て」と、頭たちは土地の言葉でさかんに議論を始めた。ひとしきり続いた後、頭は、「しかならば、御坊の言うがままに」と告げた。僧は男たちに茶毘の用意を教えた。死者たちのそばで念珠を擦りながらねんごろに誦経する。次いでナムアマダブツ、ナムアマダブツ……。葬列を作つて浜辺まで遺骸を運ぶと、もう柴の上に木々が組み上がつていた。遺骸をその上に載せる。どちらにも、それぞれの家族が取りついて哭いた。火を放つ。浜に打ちあがつた流木らしき白い肌の木々は、折からの風によく燃え、大きな炎をなびかせた。また誦経し、念仏を大音声でくり返す。女たちの哭声が混じる。焼き終わると僧と男たちは遺骨と灰をかき集め、西の方の岩場に運んで海に投げた。ちようど光をやらげた夕日が、海を隔てた阿波の山並みに落ちていくところだった。

親族たちが僧に礼を述べた。「よき葬り、ありがたかりし」と手を摺つて涙する女たちもあつた。頭は、

——礼にいささか饗あむじするゆえ、汝、今宵はここに泊まれ。見目よき女もあり。前に来たりし御坊らにもかくふるまえり。

と引き止めた。僧は勤行のあることを言い、日暮れを気にして暇を告げた。ならばと、頭は禄の穀物と綿入れなどを手下の一人にかつがせ、そして、

——御坊の話聞きたし。必ずまた訪ねよ。

僧は承諾した。僧と男が峠を越えるころには月明かりの夜になった。

それからは約束通り、十日に一度くらい、この時ばかりは勤行を中断し、山を越え、頭の家で瀬戸の人々に法話をするようになった。荒々しい人々に、六道輪廻や極楽往生をかみくだいて説き、念仏を教えた。ある時頭が、

——われら昔よりこの島の観音に帰依し、声にも心の内にもナムカンゼオンボサと称うるが常なり。そは御坊の言うナムアマダブツとは異なるや、同じなるや？

と訊いた。僧は答えた。

——結句、同じことにてはべる。観音この世にましまして阿弥陀仏を助けたてまつり、大慈悲の光明にてわれら衆生を恵みたまい、極楽往生を助けたまうなり。

何度か通ううちに、会衆ごとごとく浄土の教えに帰し、声を合わせてナムアマダブツを高声するようになった。

瀬戸ではある時、こんなこともあつた。

数度通ううちに僧を珍しがってなつてきた少年たちが、「島に奇しき所あり。見よ」とて、瀬戸の里の東の方に僧を案内してくれた。すると珍しくも湯が湧き出て流れている泉があり、島の名に違わなかった。里人はそこを祀り、その湯を薬として飲んだり沐浴に使ったりしているという。その湯脈のあるゆかりか、近くに、仏道でいう七宝の一つのみことな水晶が採れる岩場もあった。また東の端の海に面した険しい崖の下方には、波が寄り入るたび、地鳴りして潮の花を豪快に噴き上げている洞穴があった。それを見た僧はすぐに、唐国の東方海上にあるという補陀山ふだという名の信仰の島を思い浮かべた。そこにも潮音洞という、同じように海水を呑み込み噴き上げる有名な洞穴があつて、観音示現の場所だという。荒つぽいが人なつこい少年たちが見せてくれたいずれの所も、この島の靈の奇しき発現にほかならぬと僧は感得し、合掌した。

北や西の方からの寒風が強くなりまさり、島の廻りの海にも白波が立つようになった。それでも常緑の木々が覆う島の山は、播磨などの冬山とは違って青々としている。

僧はなお六時の勤行を怠らず、日夜草庵と頂きの観音堂との間を上り下りする。六時のうち晨朝しんたう・日中・日没の三時の勤めは日のあるうち、初夜・中夜・後夜の勤めは夜のうちである。日のあるうちには道や堂で里の人々にも出くわすが、夜は月や星を友とする。

寒くなつてきても、僧は島に着いた時のままの粗衣ですごす。瀬戸の頭からもらつた暖衣はすぐ里の老人に与えてしまった。橘の長者頼信の所からも次郎の舟で食物や真新しい袈、衣が届いたが、それらも大方は里の人々に与え、自分は余分なものを持とうとしなかった。庵には、衣食の用意といえば、遊行の時そのままに、一鉢と箸函と藤衣、そして紙袈のほかには何もない。冷えて堪えがたい時は、わずかに囲炉裏に楢を燃やすくらいだった。小柄な身体は痩せていくが、命はかろうじて里人の布施に支えられている。

堂の上で、海を渡つて来た寒風が荒れている。崖下からは潮騒が這い上つてくる。厨子の前に坐して瞑目しながら、もう百日以上が過ぎた、と僧は思う。だが依然として何のしるしも得られなかった。尊像は目の前におわすが、お力をわれにたまえ、と一心に願ひ続けても微動だにするふうもない。百日前と同じ古びた木像が、百日前と同じようにひっそりとおるだけだった。焦り、煩悶する。「われこれまで精進怠らず。なおわれに不足のことありや。かく甲斐なくば、もはやその崖よりこの身投げてむ」。心乱れば悪心も起こりくる。「このまま島を離れ、われは湯島観音のおかげを蒙りし者なりと騙り歩くとも、誰も咎むることあらじ。いないな、もはや還俗なりとして、巷で悪行の限りを尽くさむか」。

たまらず僧は誦経を中断して、堂を飛び出した。ふらふらと山道を下って庵の前も通り過ぎ、野らに下りた。かたわらの石の上に坐って、光降る畑や野の広がり眺めた。この寒気の中でも、春に備えて里の男女があるいは耕し、あるいは枯れ草刈っている。三方を山や丘に囲われて、風はここではよほどゆるやかだった。どこからか歌が流れてきた。またテゴの声だ。恋歌か、哀切な調子だ。声はしだいに近づいてきて、花盛りの椿の木陰から、竹杖と草刈り鎌を手にしたテゴの姿が現れた。やはり小犬がまつわっている。僧は声をかけた。

——あ、御坊や……。あやし、何しに今かかる所におる？ お山の勤め怠るや？

と、いつもの調子だ。僧はテゴの手を取ってそばにかけさせ、

——おおテゴや、われはもはや困^まじたり。もはやお山の勤めなどやめ、わが本の里へなりと去なむず、なんど思う。

——おお、あやしきことを聞くものかな。御坊も弱音吐くなるよ。本の里へ去なば、何かよきことある？ 思う女かおる？

僧は力なく笑った。

——されど、まず御坊方はわずらいなし。行かむと思わばいづくにも行くべし。せむと思わば何ごともなすべし。働かずとも物恵まる。われらとは等しからず。

——そういえば、テゴはこの春に瀬戸の里に嫁ぐことになっている。相手は瀬戸の頭の三男坊で、頭の強い申し出を実方が受けたのだった。年が明ければテゴも十七になる。愛らしい丸顔の頬に朱がさして、衣は古いが身ぎれいになっている。

——そこは瀬戸の三郎を思うや？

——あ、出家^{すけ}にふさわぬ言をいう。思う、思わぬにはあらず。祖父^{おおじ}定めしゆえ、行かずはかかる目見えぬ、性強^{こわ}き女にても、迎えてやらむと言い来しに、行きてやらむと思うばかりなり。行かば何とかなるらむ。祖父もしか言う。

——そこはよう見れば、よき女なり。色も白し。

——御坊、今日はまことにあやしき。何ごとかありし？

——テゴは心配そうに、僧の顔をのぞきこむ格好をした。それから慰めるように、

——御坊がわれらに語り教うるごと、われには心得にくきところもあれど、よき話なり。人の世のかく苦しきは何ゆえなるか、人は死なばいかになるか、教えたまう。われも死なば必ず極楽という所に生まれたし。

この野辺の里でも、庵に人がだんだん寄ってきたので、僧はたまに説教するようになった

た。もともと観音山のふもとに集つて暮らしている信心深い人たちなのだ。狭い庵に実方をはじめ十人ほどが集まつて油火の弱い光の中で聴く中にテゴも必ず混じり、熱心に耳を傾けた。皆が一つの大家族のような仲なので気楽な集まりになり、時に会衆から声も飛んだ。たとえば、漁や猟を業としている日ごろ無口な男が、とつとつこんなことを問うた。

——御坊、人、殺生すれば、恐ろしき地獄に墮つと聞く。殺生止め、よきことのみ行わば救われると、前に来し御坊方、皆言われしところなり。されどわれら、日ごろ魚貝いお獲りて食ひ、鳥兔も食らう。飢うれば、蛇鼠なんども食らう。しかせずは命つなげず。われ今生のうち、殺生の罪、浜の真砂の数ほども犯さむ。この里の者、皆しかり。かかるわれらにても、阿弥陀仏は救いたまうや？ 死なばその、極楽という淨き国へ迎えたまうや？

じつと聞き取つた後、僧は熱を込めて答えた。

——しかなり。阿弥陀仏、人を救ひたまふこと分け隔てなし。貴賤貧富男女のちがいによらず、またその人の善業悪業のいかんにもよらず。というは、阿弥陀仏、いまだ菩薩におわしける時、衆生を救はむとして四十八の願を立てられけり。その第十八の願は、誰にてもまことの心にてわが名を称えば、その人必ずわが国土に生まれさせむ、というものなり。これ最も大事なり。その後菩薩、仏となりたまひけり。願を成就したまいしゆえに。阿弥陀仏、かくありがたき仏にて、今も衆生をわが国土に引かむと誘いたまうよ。

人、誰にても、一生の間に百遍なりと、十遍なりと、いな、たとえ一遍なりともまことの心にてナムアマダブツと称えば、極楽に往生すること必定。しかも一旦極楽の池の蓮の上に生まれなば、その人、永遠とこしえに極楽におられて死にもせず。もはや地獄に墮つることなく、この苦しき六道をさ迷うこともなくはべる。

テゴが足もとの犬をかまいながら、

——もし極楽に生まれなば、わが目も開くというはまことにか？
と訊いた。

——しかなり。極楽の人は、皆よく見ゆる目を得らるるなり。

——極楽にては、もはや憂きことも悲しきこともなきというもまこと？

——まこと。憂きも悲しきも一切なきなり。

——われ、御坊の話聴くはうれし。御坊の話聴けば、何やら喜ばしき心地す。かかるよき話、われらのみならず、よその、あまたの苦しき人らにも聴かせずはなるまじ。怠らず観音に祈り申して、早う願ひ遂げたまいね。

すつとテゴは立ち上がった。

——われ、まことには御坊のごとき男に嫁ぎたかりし。御坊が御坊でなかりせば。

そう言うとし赤らめた顔をふいとそむけて去っていった。

冷たい雨が何度か通り、甕の水の表が氷る朝もあったが、雨の後は寒気の中にも日差しがしだいに明るくなってきた。正月は野辺の里でも仕事を休んで祝った。歳神を迎え、海のものや山のを供えて祀った。

だが僧はついに勤行をやめてしまった。山にも登らなくなった。「御坊は気の病にかかりしよ、何ぞ悪しきものに憑かるるにや」と里の人々は案じた。見舞いに行くと、僧は庵の中に寝ころんで何をすることもなく呆けたようにいる。頭を壁に付け、何やらぶつぶつとつぶやいていることもある。実方やテゴが野菜など携え訪れて声をかけても、ただうなずくばかりで何も答えなかった。テゴは誰よりも心配し、夕べごとに粥を作つて届けた。そのうち、ふつつり姿が見えなくなった。二日、三日と経った。山中を亡者のようにふらふらと歩いている姿を見かけたと言う人があった。いや、獣のように走っていたと別の男が言った。北の崖の下にいた、洞窟で寝ているらしいと言う人もあった。

五日目の夕方になって、ようやく僧は庵に戻ってきた。ますます細っていたが、顔は憑き物が落ちたようにすっきりしていて、里の人々はまず安堵した。

テゴが崖から落ちて死んだのは、その翌日だった。昼ごろ小舟で戌亥の方の磯を漁っていた男が、浜でテゴの小犬が変に鳴き続けているのを聞きとがめ、岩間に倒れて頭から血を流しているテゴを見つけた。もう虫の息だった。慌てて舟に乗せ、里に連れ帰ったが、ほどなく息絶えてしまった。テゴの身体に取りすがり、泣きながら実方が言うには、テゴは今朝早く、僧にたくさん食べさせるのだと春菜を採りに山に入っていたらしい。かわいそうに、手で探り菜をにおいながら斜面を這いずり回っているうちに、足を滑らせてしまったのだらうと皆が言い合った。「あわれ、この子いとおし!」「うつくしき、よき子なるを! 常によく歌いしを!」「慶びの日、近かりしを!」と口々に泣き叫んだ。僧も泣いた。

翌日の昼、皆で野辺の浜に出てテゴを茶毘に付した。瀬戸からも婿になるはずだった三郎をはじめ数人がやって来た。火と煙の立ち登るそばで僧は念珠を擦りつつ、一心にナムアマダブツを高声した。集まった老いも若きもそれに倣い、祈りの声は波音をしのいだ。近くの木々に鳥たちが集まってきてかしましく騒いだ。紫の煙は不思議にも吸われるよう

に観音山を這い上った。それを仰ぎ見て実方は、涙を振り落としながら、「あわれ、観音今しもテゴを召したまうらし」と手を合わせた。「観音菩薩は三十三の姿に身を変えてわれらを救いたまうとぞいう。テゴは観音の変化なりしならずや！」と叫ぶ者もあつた。骨と灰は葬列を作つて墓地に運んで埋められた。それから七日の間、僧はテゴの墓に日参して弔つた。

僧はその供養の終わった次の日から食物を断つた。そして久しぶりに頂きの堂に登ると、戸を閉じ、中に籠つた。尊像に向かい、陀羅尼や念仏を称えながら長い間祈つた。終わると袖をまくり、腕に香を載せ、火をつけた。腕の上が燃えた――。

姿を消していた数日間、僧は修行を放棄していたわけではなかった。真夜中、もう最後のつもりで頂きに登つて勤行した後、堂の横手の岩場の端に立った。絶望の果てに、心はかえつて静謐だった。

――今、大きな空と海の間に入れ一人立てり。われかく甲斐なき者ならば、せめて先師らに倣い、身を捨て、その功德を衆生に回向せむ。

空は灰色の雲間に星のまたたく春の夜空である。足下には黒々とした無量の水がうごめいている。僧は合掌して最後の念仏を称えようとした。その時、耳もとにかすかな声が聞こえた。それは母親がみどりこ嬰兒にささやくような声で、どこかテゴの声にも似ていた。「こちへ、こちへ」と聞こえた。僧は宙に踊り出そうとしていた足をかろうじて止めた。

それからの数日は、時々聞こえる声に導かれるままに歩いた。山中や浜辺をたどり、岩場を踏み、洞窟で横たわつた。泉の水を飲み、草の根を食べた。椎の実を拾い、鳥のように椿の花の蜜を吸つた。あちこちさまよっているうちに、自分がこの島と一つになつていくような気がしてきて心は水のように澄んだ。この島の岩も土も木もすべて、勿体なくも観音菩薩の身体にほかならぬ、自分はそれに抱かれているのだと悟つた。

声は夢の中で、なすべき行法も悟らせてくれたようだ。目覚めると僧は、もろこし仏書の中の唐の行者たちのことを思い浮かべた。観音の真身を拝まんとて、食を断つて努めた唐僧たちが幾人もいる。たとえばある法師は、西域の山寺で面したあたたかな観音像に絶食して命がけて祈つた。すると七日目、夜明け前の虚空に宝蓮華に坐した紫金相の観音が現れた。

観音はその手で祖師の頭頂を撫でながら、汝、浄土法門に帰依し、利他を行じ、往生を成就せよと教えた。また別の法師は、仏を供養するのに、腕上に香をひとくゆり焚いた――。

今、僧も食を断つた。尊像に向かつて坐し、腕上で香を焚いて供養した。それから七日の間、動かず眠らず、わずかに口中で念仏を称え続けた。

風が荒び、雨が通り、鳥や獣が寄ってきては去っていったが、外界のことは耳に入らなかった。ただしよみ蔀から洩れる光で、坐していても昼夜だけは知れた。

目を半眼にしても、夢を見ているようにさまざまな像が脈絡なく来ては去った。それはかつての遊行の途中のふとした光景であったり、幼年の時の遊びの場面であったりした。顔も覚えぬ母に抱かれていたり、行ったこともない異国の砂漠を歩いたりした。

テゴの顔も浮かんだ。崖からまつ逆さまに墜落するテゴ、しかしふつとテゴの身体は紫に光る大きな掌に救いとられた。テゴは空中に立ち、美しい目を開いて微笑んでいる。

七日目の夜、夢の中でもあったのか、目の前の尊像が光り輝いた。僧は驚いて目を開いた。すると闇の中の尊像はもとのままだった。目を閉じた。すると堂内には紫磨金色の光が満ちた――。

夜遅く、里の人々が僧を案じ、松明で照らしながら山に登った。堂の前にたたずんでみると、引き戸がわずかに動いた。戸の隙間から、倒れ伏している僧が見えた。

島陰から離れると、南から次々に寄せくるうねりに小舟はやはり揺れた。それでも今日はおだやかな方だと、次郎の漕ぐ手にはゆとりがある。舟の中ほどに湯島の方を向いて坐り、僧はずつと合掌していた。島はその僧に対し、身を閉じていくようにしてしだいに後ずさり、かすみをかけていく。春の日が波の上にもたわむれ、色を深めた。

さつき浜で野辺の人々と別れてきた。手を握り合い、涙を流し合った。吹く風の中にとテゴの声を聞いたような気がした。舟が沖に出ようとすると、瀬戸の方から左右に櫓を抜いた舟が追いついてきた。大柄な瀬戸の頭が乗っていた。僧は別れを惜しみながら、頭に、これからも自分のような行者がやって来るだろうから、来ればぜひ島に入れてやってほしいとあらためて願った。頭はわかった、これからはそうしようとうけがった。二つの舟はやがて離れた。

島に渡ったのは去年の秋の半ばだったから、島にいたのは数月にすぎないが、僧はあれからもう何年も経ったような気がした。僧の内側では、まだ静かな昂揚が続いている。そしてもう迷いはなかった。

橘の港ではわざわざ頼信が出迎えてくれた。僧のあまりに痩せ細った姿に頼信は驚いた。顔も頬骨が突き出ている。しかし目ばかりは異様に輝いていた。また自分の屋敷に招き、しばらくここに逗留して身体を休められたらどうか、と勧めた。僧は、では二、三日ばかりお願い申しますと答えた。その次の日の夜には、また屋敷で法会がもたれた。僧の説法

の調子が前よりも一段と力強いので、世慣れた頼信でさえも、少年のように魂が揺すぶられるような気がした。

翌朝、再度の逗留の勧めも辞退して、僧は草鞋を履いた。

——これよりいづくにかものしたまう？

——えい。陸奥出羽の方に巡錫せむと思いはべり。かの地、いまだみ仏の教え広まらずと聞きしゆえに。

——おお、陸奥出羽とは。かの国々、はるかなるに。

頼信は舟を出し、自分もいっしょに乗って、那賀の大川の河口まで僧を見送った。青々と芽ぐみはじめた葦原の向こうに、菅笠と粗衣の僧は消えていった。

それから三年ほどして、頼信はやはり屋敷に泊めた沙弥の口からたまたま空也のことを聞いた。その沙弥は遊行の途中、陸奥の国の会津あたりで空也を見かけたという。

——その姿いと変わりたり。立ちて肱に掛くる鉦を叩き、踊り出だすべく足を踏み、念仏休まず高声するなり。腕に焼痕はべりし。

頼信は、言葉通りにはるかな地で布教に努めているらしい異相の僧を思い浮かべ、なつかしんだ。別れる間際、小舟の上で、頼信は端座した僧に向かい、「人は、いかに生くべきか」と信仰の要諦を訊ねた。僧はやわらかな目をして、ただ一言、「捨ててこそ、となむ思いたまうる」と答えた。その控えめだが確信に満ちた口つきも思い出された。

そのころ、南海道の海は不穏だった。各地に海賊跳梁し、人多く殺され、沿岸の民は怯え、惑った。頼信の海の仕事もしいにむずかしくなってきた。海賊同士の争いも激化する中で、湯島のオサシが土佐の方から攻められてあえなく滅んでしまった。やがて瀬戸内海一円を領して朝廷や京の人々を震撼させた海賊の首領、さしもの藤原純友もついに西海で討たれたと伝えられた。

また年を経るうち、頼信は病を得て臥せりがちになったが、ある時、京からやって来た信心深い客からふたたび空也の消息を聞くことができた。

——今、京にては、空也という上人、貴賤の間に名高くはべり。人の集まる市中にて、鉦を叩きて念仏称え、人にも勧む。乞食こじきして得しものは、皆仏事に用い、あるいは貧人病者に施す。されば人、上人を敬いて市の聖ひじり、また阿弥陀聖とぞ呼ぶ。上人来たりてより後、京の人こそぞりて念仏申すこととなりはべり。

頼信はゆつくり庭に出て海を眺めた。南側に長々と伸びて湾を抱く半島の東方の沖に、今日も湯島が横たわり、かすんでいる。その上の広々とした空を、夕日がしだいに染めは

じめるようだった。頼信はやや姿勢を変えて、京とおぼしき方に向かって掌を合わせ、「市の聖、阿弥陀聖」と幾度か唱えるようつぶやいた。

(補記)

空也の湯島での修行については、源為憲の『空也誄』の一節に次のようにしるされている(原漢文)。

阿波土佐兩州の海中に、湯島有り。地勢靈奇にして、天然幽邃なり。人伝ふるに、觀世音菩薩像有りて、靈驗掲焉なりと。上人觀音に値はむが為、故に彼の島に詣づ。六時に恭敬し、数月練行するも、終に見る所無し。爰に粒を絶ちて像に向かひ、腕上に香を焼き、一七日夜、動かず眠らず。最後の夜、向かふ所の尊像、微妙の光を放てり。目を瞑づれば則ち見え、瞑ちざれば見ゆること無し。是に於て香を焼ける腕、焦痕猶遺れり

『空也誄』は空也没(九七二年)後まもなく作られたものなので、空也の湯島訪問はたんなる伝説ではなく史実だと考えられる。